千船病院広報誌　03号　2023年9月

社会医療法人 愛仁会
千船病院

虹くじら

一次脳卒中センター
「地域を持続的に支えられる〝脳神経外科〟体制をつくる」

フォトルポルタージュ
「NICU」（新生児集中治療室）の日常

千船病院「細マッチョ軍団」が案内する
「西淀川区」お風呂屋さんマップ

●二大新連載スタート●

大阪・関西万博催事検討会議共同座長
大﨑洋さん「くじら人」と会いに行く！

ゆでたまご嶋田先生の
キン肉コラム「千船生まれ！」

虹くじら

千船病院広報誌　03号
2023年9月

contents

02　千船病院広報誌「虹くじら」について

03　千船病院「一次脳卒中センター」
「地域を持続的に支えられる〝脳神経外科〟体制をつくる」

07　ちぶね～ぜ　濱田晶子　循環器内科医長

08　フォトルポルタージュ
写真家・奥田真也が長期密着
「NICU」の日常

12　ちぶね～ぜ　女性放射線技師☆座談会
「これが私の生きる道」

新連載　14　テーマは「医療」「地域」「エンタメ」
大﨑さん「くじら人」と会いに行く！
第一回　吉井勝彦　社会医療法人愛仁会 千船病院 院長

新連載　17　千船病院スタッフが夢中になっているモノ・コトを紹介
これが私の「推し活」

新連載　18　Column
ゆでたまご嶋田先生のキン肉コラム
「千船生まれ！」

19　Column
千船病院では「ストリートメディカル」実践中！

20　千船病院に来たら是非立ち寄って欲しい！
細マッチョ軍団が案内する
「西淀川区」お風呂屋さんマップ

新連載　22　— Column「くじらのつぶやき」車田絵里子
— LETTER FROM CHIBUNE

23　— 編集委員から一言
— 千船病院までの行き方

千船病院広報誌「虹くじら」について

千船病院の始まりは、日本の高度成長期、１９５０年代後半に遡ります。当時、大阪府から兵庫県に掛けての海沿いは工場地帯として発展していました。工場のほとんどは中小企業。１９５８年３月１７日、そうした労働者の方々に適正な医療の機会を与えたいと考えた医師たちが、『阿部診療所』を開設しました。阿部とは診療所にアルバイトとして勤務する医師の名前をとったものでした。この時点では医療法人としての申請も通っていない、見切り発車のような状態だったといいます。とにかく困っている人を救いたい、という思いが先走っていたのです。住所は、大阪市西淀川区佃町３丁目。阪神電車の千船駅前でした。

５８年１１月に医療法人愛仁会が設立され、翌５９年１月に医療法人愛仁会千船診察所と名称変更。６６年５月、千船病院へと発展しました。

２０１７年からは現在の場所である、阪神電車福駅前に新病院として移転。現在、病床数２９２、２１診療科を有する急性期総合病院となっています。

草創期、そして高度医療を提供する今も変わらないのは、地域の方々に最高の医療を提供しようという強い意思、困った患者さんがいれば、可能な限り受け入れるという姿勢です。

千船病院では年間１００件以上の母体搬送を受け入れており、年間分娩数は２０２２年度で２３６１件。この数字は大阪府内で最多です。この中には〈妊婦健診を1度も受けずに分娩、または入院に至った〉という未受診妊婦、約３０人が含まれます。正確な統計はないものの、日本で最も未受診妊婦を引き受けている医療機関の１つであることは間違いありません。社会的に問題を抱えている、家族に頼れない人たちにも可能な限り寄り添いたいというのが千船病院の方針なのです。

病院のある西淀川区は、クジラのような形をしています。おおきなクジラのように、多様性（＝虹）ある人々を受け入れる存在になる。そんな思いから千船病院の広報誌に『虹くじら』という名前をつけました。すでに２０２２年夏と２０２３年春に２冊をプレ創刊しました。２０２３年夏から年２回、定期刊行していきます。

取材・文　村上敬　　写真　奥田真也

千船病院　一次脳卒中センター

「地域を持続的に支えられる〝脳神経外科〟体制をつくる」

「一次脳卒中センター（PSC）」とは、地域の医療機関や救急隊からの要請に対して、24時間365日脳卒中や脳卒中を疑う患者を受け入れる医療機関のことだ。PSCで患者を診察する医師は精神的、肉体的に疲弊する。医師をサポートするスタッフも同様だ。チームをまとめ、叱咤激励できる「アクティブな医師」でないと務まらないと、副院長の樋口喜英は榊原を評する。

▼血管造影装置と榊原史啓

脳卒中（脳梗塞、脳出血、くも膜下出血など）を疑われる患者が運び込まれると救急に緊張が走る。時間との勝負だからだ。

まず優先するのは、採血である。

脳血管に詰まった血栓を溶かすt-PAという薬がある。点滴で投与すると、約3分の1の患者に効果がある。t-PAを投与できるのは脳梗塞発症後4時間半以内だ。救急に搬送されてから60分以内の投与開始を目指す必要がある。適応するかどうかの判断は血液検査による。結果が出るまで、30～40分。まず採血をしないと、その判断が遅れてしまう。

採血の後、放射線科でMRI（磁気共鳴画像）やCT（コンピュータ断層）を撮影、脳で何が起きているのか調べる。

意識混濁の原因が脳の血管の詰まりではなく、破れたことならば、開頭手術がありうる。またt-PAで出血性の副作用が出た場合も手術だ。

手術が要るとわかればオペ室は準備に追われ、開頭が始まると緊張感は最高潮に達する。脳の柔らかさは木綿豆腐ほど。崩さないように細心の注意を払いながら、脳みそを分け、深部にある破れた血管を処理する。手術時間は4～5時間。終わればみんなグッタリだ。

「脳神経外科の手術は、まるでお祭り。みんなでわっしょいわっしょいとやって、嵐のように過ぎていく。メリハリのあるところが自分の性に合っています」

患者が運び込まれてからの怒涛の数時間をこのように表現したのは、千船病院脳神経外科部長の榊原史啓（さかきばらふみひろ）である。

千船病院は2021年4月、一次脳卒中センター（以下PSC）の認定を受けた。PSCは脳卒中患者を24時間365日受け入れて、t-PA静注療法などの急性期診療を行う。新たにPSCの認定を受けるというミッションを掲げた千船病院の脳神経外科が、連携する兵庫医科大学病院から招いたのが榊原だった。

最初に来たときの印象をこう語る。

「千船病院はメディカルスタッフ（医師を除く医療従事者の総称）がとても優秀です。看護師は協力的で、リハビリのスタッフもやる気のある人ばかり。これならすぐ立ち上がるなと」

千船病院がPSCを立ち上げたのは、2020年3月に大阪府知事から「地域医療支援病院」の承認を受けたことと関係している。地域医療支援病院は、地域医療の確保を目的とした地域の基幹病院のことだ。地域のかかりつけ医らを支援するため、相応しい構造設備を備えていることなどが条件になる。副院長の樋口喜英（ひぐちよしひで）は次のように説明する。

「今後ますます高齢の方が増えていくことを考えると、成人病やがん、骨折などでも地域のニーズに応えられる病院になっていく必要がある。その中でも、脳卒中の受け入れは地域から強く求められていたものの1つでした」

以前は、千船病院は脳卒中の受け入れに積極的ではなかったと、樋口は振り返る。

「脳神経外科は相当にハードです。全体をマネジメントするベテラン部長と、脂がのってバリバリ働いてくれる中堅、そしてこれから伸びる若手というバランスならうまく回るのですが、以前の脳神経外科は体力も技術もある中堅が不在で、対応できなかった」

大阪市西淀川区で脳神経外科の救急を受け入れているのは千船病院だけだ。千船病院が救急隊からの要請を断ると、患者は淀川を渡って福島区の病院まで搬送されるケースが多かった。

脳梗塞は治療が遅れるほど後遺症が残りやすくなる。地域医療支援病院を名乗るからには、救急隊からの要請やクリニックからの紹介を受け入れられる体制を構築することが急務だった。

「脳神経外科の医師は患者を受け入れるほど負担が増しますが、それをものともしないくらいアクティブな先生がいないとPSCは立ち上がらない。そう考えていたところに榊原先生が来た。求めていた人が加わったことで現実に動き出したんです」

防衛医大から海上自衛隊、そして脳神経外科医へ

救世主となった榊原はどのような医師なのか。

出身は大阪府茨木市だ。医師という職業を意識したのは、中2で塾に入ったときに受けたIQテストがきっかけだった。本人は当時をこう振り返る。

「おそらく私にやる気を出させようとしたのでしょう。『キミ、このIQなら医者か弁護士になれるよ』と。それで調子に乗りました」

学区トップの進学校に入学するが、そこで現実を思い知る。まわりは自分より優秀な生徒ばかり。将来は官僚や経営者として活躍するだろう級友たちになかなか敵わない。ならば違う土俵で彼らを助ける役に回ろうと、医師を目指すことを決めた。

現役のときは志望校の医学部に落ちた。一浪して猛勉強したが、不合格。ただ、受験時期が違う防衛医科大学校には受かっており、二浪はせずに入学を決めた。

防衛医科大学校は防衛省の管轄で、医官となる幹部自衛官の育成を目的に設置されている。大学医学部と同じく卒業時には国家試験を受けて医師資格取得を目指すが、カリキュラムやキャンパスライフは大きく異なる。

「全寮制で、下級生は上級生と2人1部屋。軍隊のイメージそのまんまで、『声が小さい』と言われては後ろから蹴られるような毎日でした。私のときは65人が入学して、夏には1割が辞めていた。つらかったですが、おかげでストレス耐性がつきました」

2006年に卒業して海上自衛隊医官となった後は、防衛医科大学校病院で2年間研修。そこで出会ったのが脳神経外科だった。

もともと頭を使うより手先を動かすほうが好きで、外科医になることは決めていた。1年目は呼吸器外科で学んだ。肺がんは脳に転移することもあるので、脳についても勉強しようと翌年は脳神経外科に。そこで〝わっしょいわっしょい〟の世界に触れた。

「『終わったら飲みに行くぞ』というノリで、みんなでワーッと手術をするんです。語弊があるかもしれませんが、高揚感があって刺激的。自分はこの道を極めようと思いました」

研修が終わった後は自衛隊横須賀病院で2年間勤務した後、大学病院に戻り、脳神経外科医としての経験を積んだ。

医官になって9年目、転機を迎えた。防衛医科大学卒業生にとって、この「9年目」は大きな意味がある。卒業後、医官として9年間の勤務を義務づけられている。その期間が終了するのだ。

一人前の外科医として通用するという自信はあった。ただ、脳神経外科界で〝匠の手〟と呼ばれる上山博康（かみやまひろやす）や谷川緑野（たにかわろくや）が所属する札幌禎心会病院脳神経外科――通称「上山塾」――に2年間、国内留学して、自信を粉々に砕かれた。

「手術のやり方がまったく違いました。たとえば大学病院のときはズバッと皮膚を切ってましたが、上山塾では皮膚の構造を考えながら切る。膜の上で剥がすようにして切ると出血が少ないんです。何から何まで洗練されていて、芸術作品のようでした」

国内留学すると、その半分の期間を医官として継続するのが内規だった。脳神経外科のない自衛隊舞鶴病院で隊員の健康診断などを担当した。それも重要な仕事だが、手術をしなければ外科医として腕がなまってしまう。1年後、渇きを癒すようにして手術ができる病院に転職した。

転職先として選んだのは兵庫医科大学病院だった。兵庫医科大学には、カテーテル治療で有名な吉村紳一がいる。脳神経外科医としてステップアップするためにカテーテルの技術も身につけようと選んだ転職先

だった。

兵庫医科大学では1年半で130件の外科手術の術者を経験。そして2020年、千船病院PSC立ち上げを打診された。

「バカヤロウ。そんなことで脳卒中センターができるか！」

2020年4月、千船病院にやってきた榊原が手始めにやったのは、救急隊や近隣のクリニックへの挨拶まわりだった。体制を強化して積極的に受け入れる方針であることを伝えると、たいていは「助かります」と喜ばれた。

むしろ壁があったのは院内の体制だった。挨拶まわり効果で件数が増え始めた時期のある日の午後、脳出血を疑われる患者の受け入れ要請がきた。榊原が手術室にいくと、麻酔科医が「今埋まっている。他の病院に転送してほしい」と拒否。口論になった。

「バカヤロウ。そんなことで脳卒中センターができるか！」

大声を出したが、麻酔科医も譲らない。榊原は仕方なく転送の準備を始めた。

そこに駆けつけた樋口の証言だ。

「麻酔科の先生は患者の安全第一で、予定外の対応を行うことによって生じる様々なリスクは避けたい。一方、榊原先生は運ばれてくる患者へのスピーディな治療を第一に考える。両方とも真剣だから自然に声が大きくなったのでしょう。結局、麻酔科の先生に折れてもらい、受け入れてもらうことにしました」

脳卒中の患者を受け入れるという、病院の方針が伝わると現場も軟化する。この一件以降、麻酔科も柔軟に対応してくれるようになった。

榊原はこう語る。

「私は別に大変じゃなかったですよ。苦労されたのは、樋口先生を含め千船病院の幹部たちでしょう。いろいろ調整に骨を折っていただきました」

特に看護部では、人員配置を大きく変えて、脳卒中患者に対応した。榊原自身の負担も相当なものだ。PSC認定要件の1つは、脳卒中診療に従事する医師（専従でなくても可。前期研修医を除く）が24時間7日体制で勤務していること。この要件を満たすため、週2日は当直に入った。1日は兵庫医科大学から応援に来てもらえたが、あと4日は外科や内科の当直医に任せ、榊原自身はいつでも駆けつけられるように待機していた。

「脳卒中で運ばれてくるのは、せいぜい夜11時まで。それ以降は発症してもご家族が寝ていて気づきません。気づくのは起きてからなので、朝6時ごろの搬送が意外に多い。夜中はお呼びがかからないから、普通に寝ていましたよ」

本人はケロリと語るが、週6日は当直あるいはオンコール状態。PSCは榊原のハードワークなしに立ち上がらなかったことがよくわかる。

その甲斐あって認定が下り、手術件数も増えた。2019年は約40件だったが、2020年は80件と倍増。手ごたえを感じた榊原は、「人がいればもっと患者さんを受け入れられる」と医局に増員を要請。2年目はさらに医師が1人増え、実際、手術件数は120件まで伸びた。

ただし、榊原のマンパワーに依存していたことは否めない。榊原が、2022年に兵庫医科大学に戻ると、途端に手術件数が減った。

この事態を受けて、榊原は2023年4月に千船病院に戻ってきた。現在、PSCをふたたび軌道に乗せるべく奮闘中だ。

単に元に戻すだけではない。2021年9月に榊原は、兵庫医科大学でカテーテルの修練を積み、カテーテル専門医の資格を取得した。専門医になれば、詰まった血管にカテーテルを入れて血栓を除去する脳血栓回収療法を行える。脳血栓回収療法は、t-PAの適応外や投与後に効き目がなかった症例に適応できる。

榊原の目線はあくまで高い。

「カテーテル中心の時代になっても、自分はやはり手術が好き。個人的には、またどこかに国内留学して腫瘍の手術を学びたい。そのためには、私がいなくても千船病院脳神経外科が地域を持続的に支えられる体制をつくる必要があります。まずはそこに全力投球です」

榊原がふたたび去るときが、千船病院脳神経外科が真の意味で脳卒中に関して地域の基幹病院になるときなのだろう。

ちぶね～ぜ

取材・文　今中有紀　　写真　奥田真也

循環器内科医長

濱田晶子 はまだ・あきこ

誰もが最期の迎え方を選べる「未来」を目指して

千船病院には、訪問診療に携わる医師が8名いる。そのうちの1人が、濱田晶子だ。普段は循環器内科医長として外来や入院患者を担当しながら、週1回、同法人内の千船病院附属千船クリニックで訪問診療も担当している。訪問診療とは、在宅医療を希望する患者に自宅や施設で定期的な診察を行い、医学的な管理やケアを行うことだ。濱田が訪問診療を始めたのは、約1年前。前任の医師が退職することになり、声がかかった。院内の診察に訪問診療が加わる負荷は小さくはなかったが、挑戦することにした。

「循環器内科医として、心不全などで治癒が見込めない終末期の患者さんとたくさん向き合ってきました。退院することなく病院で亡くなる方が多い中、人生の最期をどう迎えるべきかを考えることが多くなったのです。そのひとつの選択肢として在宅医療があると思い、やってみようと思いました」

訪問診療をはじめて見えてきたことが多くあった。

「家に入ることは、生活が見えるということ。家の中の段差が危ない、家族も高齢で大変そうだ、など病院の診察だけでは気づけない部分が見えてきました。場合によっては公的、医療的支援につなげられています」

その他にも訪問診療ならではのやりがいを感じることは多いという。

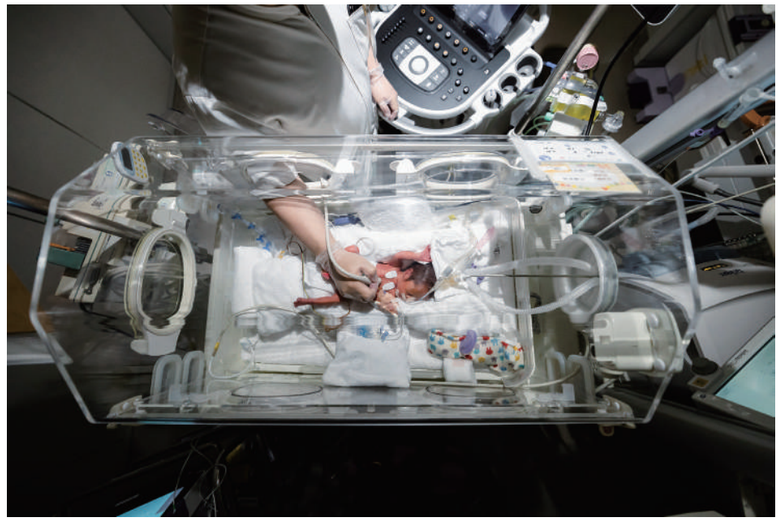
「病院よりも長く接するため患者さんやご家族と、より〝人と人〟として関わることができています」

その中でも、印象に残っている患者がいる。入院時にその患者は自宅で最期を迎えたいと望んでいたが、家族が難色を示していた。濱田が家族と何度も話し合いを重ねることで同意を得て在宅医療に切り替えた。その後、家族からは不安の声がたびたび寄せられた。そのたびに濱田は丁寧に家族と向き合い、寄り添い、不安を取り除いてきた。

「次第にご家族も在宅ケアに慣れて、患者さんが安心して過ごせるようになりました。いつ訪問しても入院中は見たこともない柔らかな表情をしていて。最期を迎える直前も、家族と一緒にご飯を食べていたそうです。そんな幸せな最期を看取れたことに対してご家族が〝最期はおうちでよかった〟と言ってくれたのです」

この患者のように望む形で最期を迎えられる人は決して多くはない。

「現在の在宅医療は家族のサポートがないと成り立ちませんが、例え独居でも自宅で最期を迎えたいという願いをいかに叶えていけるかということは今後の課題だと思っています。〝誰もが最期の迎え方を選べる〟そんな未来を実現するために、できることからやっていきたいですね」



写真家・奥田真也が長期密着

「NICU」の日常

千船病院は大阪府が認定した17の「地域周産期母子医療センター」の1つである。地域周産期母子医療センターとは、産科・小児科（新生児）を備え、周産期に係る比較的高度な医療行為を常時担う医療機関を意味する。

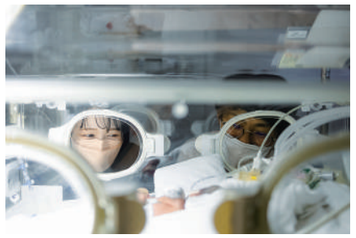
千船病院では年間約2300件以上の分娩を扱う日本でも有数の分娩施設であり、関西では数少ない24時間無痛分娩に対応している。また大阪府周産期医療システム（大阪府産科婦人科相互援助システムOGCS）の準基幹病院として母体胎児集中治療室、新生児集中治療室（NICU）を備え、大阪府内、兵庫県内から「集中治療が必要な妊婦」を受け入れている。

千船病院のNICUでは早産児（在胎37週未満で生まれた赤ちゃん）や出生体重300グラム台の超早産児（在胎28週未満で出生）や何らかの疾患がある新生児など、年間約500人以上の治療を実施している。

NICUで勤務する医師は20名、看護師は30名。24時間体制で2交代制だ。常時、赤ちゃん3人に対して看護師1人がつく。薄暗く、適温が保たれた部屋。赤ちゃんにセンサーが取り付けられており、少しでも異常があればアラームが鳴る。赤ちゃんの状態を担当看護師以外もモニターで確認することが出来る。考え得る万全の体制である。

この千船病院NICUに、虹くじらのオフィシャルカメラマンである、写真家・奥田真也が長期密着した。

面会に来た親たちが優しい眼差しで赤ちゃんの小さな手を握る姿、赤ちゃんに話しかけながらガラス細工を扱うように丁寧な世話をする看護師、小さな赤ちゃんの逞しい生命力――。奥田は「ここに通っていると不思議な力をもらう気がするんです」と言う。



奥田真也（おくだしんや）

1980年、兵庫県姫路市生まれ。大阪芸術大学写真学科卒業後、イギリスへ遊学。ウェディング写真、広告写真を中心に活動。特に女性の優しさを引き出すことに定評がある。虹くじらオフィシャルカメラマンとして、誌面ほぼ全ての写真を担当をしている。

取材・文　今中有紀　　写真　奥田真也

ちぶね～ぜ

女性放射線技師☆座談会

「これが私の生きる道」

強力な磁場を発生させるMRI検査やレントゲン、CT、マンモグラフィなどの放射線を使用した検査や治療を行う放射線技師。千船病院には23名の放射線技師が在籍しており、うち9名が女性。乳がん検診はやはり女性技師が望ましいということ、そして宗教的な理由で異性に肌を見せられないという外国籍の女性が地域に増えていることで、乳がん検査以外の検査でも女性技師が求められる傾向があります。今回は、そんな女性放射線技師3名に集まってもらいました。

―千船病院は女性の放射線技師が多い方だと聞きました。

三島　私が千船病院に入職した約20年前は、女性技師は私だけ。その後に尾崎さんが入ってきてくれたときは救世主！って思いました。それまでは（女性の乳房の疾患を診療の対象とする）「乳腺外来」の日は、絶対に休めないというプレッシャーがありましたから。

尾崎　現在は育休中の女性技師もいますが、問題なく業務がまわるほどの人数です。ここ10年程で女性技師は誰も辞めていないんですよ。

―千船病院は乳がんの早期発見に力を入れているのですね。

三島　はい。通常の検診でのマンモグラフィはもちろんのこと、多くの断面画像が撮影でき乳がんの発見率が高いといわれている「3Dマンモグラフィ」も取り扱っています。またもうすぐ、「無痛MRI乳がん検診（注①）」もスタートする予定です。

尾崎　乳房を板で圧迫し薄く伸ばした状態で撮影するマンモグラフィの検査時の痛みに抵抗がある方や、体を他人に見られたくないという方にとって、痛みを伴わず、専用の着衣で検査を行える「無痛MRI乳がん検診」は、新しい乳がん検診の選択肢になり得ると思います。

―放射線技師として働く上で大変なことや、やりがいは何ですか。

尾崎　乳がん検診で所見が認められる画像が出たときに、すぐに外来受診をすすめ、結果としてがん治療の初動を後押しできたときには、本当によかったと思いました。

三島　マンモグラフィに限らず、検査での病気の見落としによって助からなかった患者さんの事例もニュースなどで耳にします。発見が難しい病変を見つけられたときはやりがいを感じます。

吉岡　救急では負傷していたり意識がない状態で運ばれてくることもあるので、自力で動けない患者さんの対応は大変ですね。苦労して対応した患者さんが後日外来で来院して「あのときはありがとう」と声をかけてくださるとうれしくなります。

―仕事をする上で工夫していること、心がけていることはありますか。

吉岡　マンモグラフィでは、事前に「できるだけ乳房を薄くした方が正しく撮影や診断ができるから、頑張ってください」と痛みに耐える意義を伝えておきます。その方が患者さんも納得して協力してくださるからです。

尾崎　力を抜くと痛みがマシに感じますよ、と自分が検査を受けた経験も踏まえて声がけしたりもしますね。

吉岡　自分の経験は大切ですよね。他の検査でも、新人のとき、私が行った患者さんへの姿勢の指示を先輩が見て「自分でその体勢できる？しんどいで」と言われて、再現してみたら本当にキツかったことがありました。それからは自分でも試しながら、患者さんにとって楽で、かつ的確な撮影ができる姿勢を考えるようにしています。

三島　お子さんの撮影では、ぬいぐるみを渡して「ぎゅって抱っこして、動かんといてな」という風に具体的な声がけをするようにしています。すると、お子さんも頑張ってくれるんです。

―今後の目標を教えてください。

三島　女性技師の中でキャリアが一番長いので「三島さんに聞けばなんでもわかる」と頼られる存在になれるよう勉強し続けていきたいと思います。

尾崎　いずれ出産して母親になったとしても現役でバリバリ働き続けたいですね。3人のお子さんを産み育てながら活躍している三島さんというロールモデルがいるので心強いです！

吉岡　3年に1度認定が行われる「マンモグラフィ施設・画像評価（注②）」でA評価をとれるよう、日々仲間と切磋琢磨しながら撮影の技術を磨いていきたいと思います！

①無痛 MRI 乳がん検診
MRI（磁気共鳴画像）を用いるため乳房を圧迫せずに乳がんを検出する新しい検査法。DWIBS 法という技術を利用し、造影剤も使用せずに無痛で行える（現在は自費診療扱い）。

②マンモグラフィ施設・画像評価
NPO 法人日本乳がん検診精度管理中央機構がマンモグラフィの撮影技術、被曝線量管理、装置の品質管理が適正な状態かを審査し、質が高いと評価した施設に認定を与えるもの。千船病院はA～D評価のうち現在はB評価認定。

テーマは「医療」「地域」「エンタメ」

大崎さん「くじら人」と会いに行く！

第一回 吉井勝彦

社会医療法人愛仁会 千船病院 院長

『虹くじら』定期刊行化にあたって、「千船病院の広報誌で連載コラムやりませんか」と大崎洋さんに連絡したところ、「コラムもええけど、ぼくも病院のこと勉強したい。万博の仕事で大阪にいることも多いし、病院の方と会えへんかな」と思ってもいなかった嬉しい返事が。急遽、大崎さんが千船病院の関係者と語り合うという企画に変更しました！　記念すべき第一回は、千船病院の吉井勝彦院長が大崎さんを迎え撃ちます！

吉井　大崎さん、いきなりなんですが、こちらから質問してもいいですか？　大崎さんの著書『居場所。』（サンマーク出版）を読ませて頂きました。会長を務めておられていた吉本興業には〝定年〟がないと書かれていました。それにも関わらず、4月末に吉本興業を退社されました。この理由をお聞きしたいです。

大崎　芸人さんも年を取っていきます。それに寄り添う社員がいてもいい。年齢で区切らなくてもいいんじゃないかと思って、定年を廃止したんです。ぼくも元気なうちは会社にいるつもりでした。ただ、どこかでスパッと辞める方がいいんじゃないかなという思いもありました。とはいえ、そもそも、自分は何をしたかったんやろうと考えたんですが、何も出てこない（笑い）。辞めても何もできないしなぁ、と。

吉井　（手を振り）そんなことはないでしょう。

大崎　死ぬまでに1つぐらい、いいことしなきゃいけないじゃないですか。硝子細工のように繊細な若者に寄り添う、あるいはシングルマザーで困っているお母さんや子どもたちの力になれないか。彼ら、彼女たちに向き合う、あるいはサポートを出来るシステムを作ったらどうだろうって考えたこともあります。人生の残りの何年間で何が出来るだろうって、1年ぐらい悩んでいたとき。万博の打診が来たんです。

吉井　そして、大阪・関西万博催事検討会議の共同座長に就任された。

大崎　熱心に誘ってもらいました。しがない漫才師のマネージャーですが、ありがたく受けさせていただきますということになりました。

吉井　『居場所。』の中で、お母様を病院で看取った話が印象的でした。大崎さんが病院の人と会って話をしたいと思うようになったのも、その経験からでしょうか？

大崎　母に加えて、嫁のことでぼくは結構、病院に縁があるんです。嫁がずっと入院していて、リハビリもできないほどの状態になりました。ぼくが病室にいると、お医者さんが若い先生や看護師さんと来てくださる。でも、先生たちは1分ぐらい立って見ているだけなんです。身内の感覚からすれば、どうせ短い時間なんだから、ベッドのところまで行って、手でもさすってあげたらええのにと思っていました。お笑いのチラシを道で配ることがありますよね。（さっと立ち上がり、腕を伸ばして）こうやって通行人の方に渡してもなかなか受け取ってくれない。（腰を屈めて頭下げながら）こうすると受け取ってもらえる確率が高くなる。お医者さんは忙しくて、考えることが多いのは分かるんです。でも、そんな風でいいのかなと悶々とした思いがあった。

吉井　その気持ちは分かります。患者さんに寄り添う姿勢や言動が大事であることは先輩医師から学びました。なかでも兵庫県立こども病院の中尾秀人先生に一番影響を受けました。

大崎　吉井先生は、小児科医ですものね。

吉井　はい。小児科の中でも赤ちゃんの病気を専門に診療する新生児科医です。予定日より早く生まれてくる赤ちゃんの出生時に立ち会うことがあります。その小さい赤ちゃんが生まれて泣きだすと、中尾先生は、いつも大きな声で、『おめでとうございます、元気な赤ちゃんや』と、分娩室や手術室に響きわたる大きな声を出しておられた。僕もそれを実行しています。

大崎　お母さんは子どもが無事か、を心配している。先生の「おめでとうございます」という声を聞くと安心しますよね。

吉井　お母さんは生まれた赤ちゃんをすぐには見ることができないので、出産時は耳がダンボというか、情報源は耳だけなんですよね。若手医師はまだ照れがあるのか、部屋に響き渡るような大きな声ではやってくれませんが。ところで、大崎さんは（大阪府）堺市生まれです。千船病院のある西淀川区にはどんな印象をお持ちですか？

大崎　喧嘩の強そうな若い子がいっぱい、いてるという感じですかね（笑い）。昔、知り合いに「西淀川の虎」と呼ばれていたという人がいたんです。その人は、勉強が嫌いだったみたいですけれど、実社会での生きる力、リーダーシップを持っていた。勉強が出来てお医者さんになる、国会議員になるというのもいいんですけれど、これからの世の中って先が読めないじゃないですか。感染症、自然災害、ロシアの戦争など予想できないことが起こる中で生き抜く力をどう身につけるかって思っているんです。

吉井　西淀川の虎と呼ばれた方のような、逞しさが必要になるということですよね。

大崎　ぼくが地方創生の分野で師事している清水義次さんという方がいます。彼は『民間主導・行政支援の公民連携の教科書』（日経BP）という本も書かれてます。清水さんがいつもおっしゃっているのは、これからの子どもたちの教育において、主要5教科の勉強時間は全体の2割でいい、と。

吉井　5科目とは英語、国語、数学、理科、社会のことですね。

大崎　はい。この5科目はオンラインでもいい。残りの8割の勉強時間は、技能4教科に割く。つまり、音楽、美術、技術家庭、体育。この技能4教科に加えて、道徳を自然の中で学ぶことができれば子どもたちに生きる力が身につくとおっしゃったんです。

ぼくはそれを聞いてその通りだと、目からうろこが落ちた。同じようなことが病院でも出来るのではないかと思うんです。

吉井　病院が学びの場になると？

大﨑　病院で子どもがおじいちゃん、おばあちゃんと話をする。お手玉とか竹とんぼの作り方を教えてもらう。そういうコミュニケーションがあると、思春期になって、おじいちゃん、おばあちゃんが臭いとか言わなくなる（笑い）。そういう機能が家庭から失われているような気がするんです。

吉井　千船病院が目指しているのは大﨑さんのおっしゃっている方向性と近いかもしれません。千船病院は昨年8月に〈活気があり、笑顔にあふれ、常に進化するまちの実現〉を目指して、西淀川区と包括連携協定を結びました。福ハッピーフェスタという祭りを年に3回ほど開いて、地元の吹奏楽団に来てもらったりしています。幅広い年代の人たちに病院に集まってもらいたいと考えているんです。

大﨑　ぼくの知り合いの起業家がゴルフ場の中に田んぼを持っていて、彼らの家族と遊びに行ったことがあるんです。そこで田植えを経験するという目的だったんですが、子どもたちは汚れるからってやらない。18人の子どもで、田んぼの中に入ったのはたった2人だけ。みんな足が汚れる、汚いっていうんです。

吉井　田植えの時期の田んぼにはヒルもいますからね。僕は兵庫県たつの市出身で、実家が兼業農家でした。小学校低学年の頃は田植えも機械化されておらず、田植えの手伝いもしました。土に触れることは好きですが、ヒルに血を吸われて痒くなった記憶があります。

大﨑　姫路市の隣りですね。すごくいい環境ですよ。

吉井　ところが、地方では就職先である企業がたくさんあるわけではないので、同級生も大学進学で東京に行くと、卒業後は半数ぐらいしか地元に戻ってきていません。地方の過疎化は想像以上の早さで進んでいるように思います。

大﨑　西淀川区は工業地帯なので、田んぼや畑はそんなにない。区との共創に加えて病院を核にして、農家の方々、地域の子どもたちを結びつけるのも面白いんじゃないでしょうか。

吉井　（大きく頷いて）西淀川区も徐々にですが人口は減っているんですよ。西淀川区は東を淀川、西を神崎川、南を海に囲まれた特異な地形をした町で、都市部でありながら、地方的な要素もあるのかもと考えています。地方では病院がコミュニティの中心となっているところも増えているので、千船病院も同じような機能をもってもいいと思います。

大﨑　ぼくは昔の商店街みたいなところを、スリッパ履いて、ぶらぶらするのが好きなんです。病院にそんな風に遊びに行ったら、お母さんがいて子どもが走り回っていたりする。そういう光景眺めているだけで楽しいなって思う。病院という垣根が低くなると、病気の早期発見に繋がる。うちの母親もそうだったんですが、特に女性は、ぎりぎりまで我慢してお医者さんのところに行くという人が多い。

吉井　早期発見は重要ですね。。近所の方がちょっと病院を覗きにきて、ついでに検診を受けようかなっていう感じになれば、病気の予防、未病に繋がる。大﨑さん、色んなアイディアをありがとうございました。今後とも千船病院を宜しくお願いします。

大﨑　こちらこそ！　また来ます！

2人で“くじら”のポーズ!!

吉井勝彦（よしいかつひこ）
1959年兵庫県出身。1984年高知医科大学（現高知大学）医学部卒業、神戸大学医学部小児科学教室入局。
神戸大学小児科の関連病院である公立豊岡病院、姫路赤十字病院、甲南病院、兵庫県立こども病院、千船病院に勤務。2018年愛仁会千船病院院長に就任。
地域医療支援病院、地域周産期母子医療センター、大阪府がん拠点病院として、『医療を通じて社会貢献』の病院理念を実践し、次世代の人材育成にも注力している。福駅高架化に伴う工事を契機に始めた西淀川区との共創事業や、『医・食・住』、『幸福と健康』の街づくりにも精力的に取り組んでおり、地域の人から愛される病院づくりを目指している。

大﨑洋（おおさきひろし）
1978年、吉本興業株式会社に入社。多くのタレントのマネージャーを担当し、音楽・出版事業、スポーツマネジメント事業、デジタルコンテンツ事業、映画事業などの新規事業を立ち上げる。2009年に代表取締役社長、2019年には代表取締役会長に就任。2023年6月代表取締役会長を退任。2023年5月大阪・関西万博催事検討会議共同座長に就任。また、公益社団法人「2025年日本国際博覧会協会」シニアアドバイザーも務める。
現在、一般社団法人 mother ha.ha を設立し代表理事に就任。

これが私の『推し活』
oshikatsu

今回紹介してくれるのは…

手術室看護師　竹村 由樹（たけむら ゆき）さん

手術時の患者の介助や器械出しなどを行う手術室看護師。新人看護師に対しての実地指導や、手術後の患者の“痛み”をケアする「術後疼痛管理チーム」の活動も担当。プライベートでは3児の母。
@yuki_orn

竹村さんの「推し活」は、編み物。ファッションアイテムや小物、雑貨などを編んで自分で使ったり、販売したりしている。編み物との出会いは、約10年前だ。

「夫の海外赴任でマレーシアにいた頃です。そこで出会った友人が自分で編んだ素敵なバッグを持っていて興味を持ち、私も挑戦してみました。すると、思ったよりいい感じに編めたんです！日本では看護師として忙しく働くワーキングマザーだったのに、急に専業主婦になり時間ができたこともあり、編み物に没頭していきました。編み棒と糸だけで平面も立体もなんでもつくれてしまうのが楽しくて」

時間のゆとりができたことで編み物にハマった竹村さん。日本に帰国後、看護師に復帰し再び忙しい日々を送ることになっても、編み棒は手放さなかった。

「忙しい時間の合間に編み物をすると〝無〟になれて、オン・オフが切り替えられたのです。だから、職場にも糸と編み棒を持参して、休憩時間に編んでいます」

竹村さんによると、編み物は仕事と共通する部分も多いという。

「手術ではひとつのミスが、患者さんに大きな支障をきたすことになってしまうので、細心の注意、集中力が必要です。編み物も同じで、雑に手を動かす、あるいは目数を間違えてしまうと後々の仕上がりに影響が出てしまうので、ミスなく丁寧に編むことを心がけています。それが、手術室看護師に求められる力を養うのにも役立っている気がします」

さらには編み物を通じて、乳がん患者が術後に使用できる手製の胸パッド「ちあぱい」を無償で提供しているコミュニティに出会った。

「Instagramで編み物好きの人たちとつながる中で、この活動を知りました。仕事で乳がん手術にも立ち会うことがある身として何かしたいと思い、病院スタッフの協力のもと、乳がん患者さんの目につく外来などに〝ちあぱい〟やパンフレットを設置しました。〝ちあぱい〟のミニストラップも自作して置いています。徐々に患者さんの手に渡っていっており、やってよかったなと感じています」

編み物によって新たな縁や作品を生み出し続ける竹村さんは、幸せな〝沼〟にどっぷりと浸かっている。

「ソックヤーン（靴下用の毛糸）を使った編み物にもハマっています。靴下用なので丈夫な上に、編むだけで模様が出てくる毛糸なんかもあって、つい色々買ってしまうんです。自宅にはいくつも毛糸用の衣装ケースがあるほど。ひとつの作品が完成したら、〝次はあれを使ってつくりたい！これもつくりたい！〟と次々と欲が出てくるんですよ」

mi-ken Company
ミーケンカンパニー
大阪市西淀川区野里 1-29-19
［営］土曜・日曜　11:00-17:00

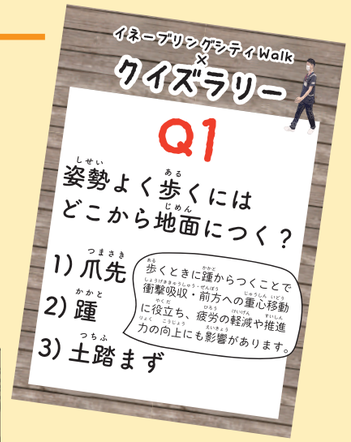
竹村さんの作品はここのお店で買えます！ブランド名はマレー語のハイビスカスを意味する「Bunga Raya」。

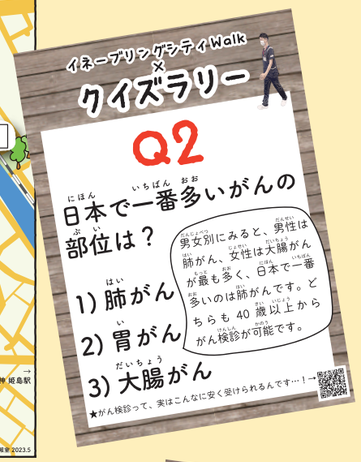
取材・文　今中有紀　　写真　奥田真也

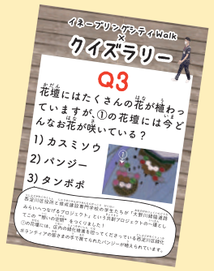
好評連載

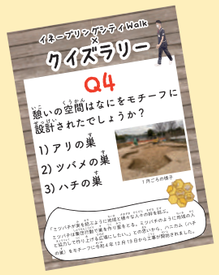
千船病院では「ストリートメディカル」実践中！

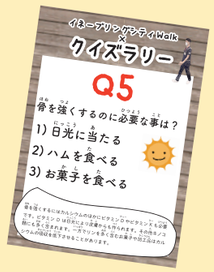
ストリートメディカルとは「ハッピー」を感じながら自然と健康になること！











5 月 14 日、千船病院では「福ハッピーフェスタ」を開催しました。「健康×まちづくり」をコンセプトとして、西淀川区を縦断する大野川緑陰道路で「イネーブリングシティウォーク」という、クイズラリーを行いました。イネーブリングシティとは「健康と幸福」が両立する街を意味します。

健康に関する、そして新しいコミュニティスペース「憩いの空間」に関するクイズを2kmのウォーキングコース上に設置。参加者は自然と健康に関する知識を得た上で、2km歩くことになります。ちなみに「憩いの空間」は西淀川区にある修成建設専門学校の学生が作ったスペースです。全 5 問のクイズに答えた参加者には阪神電車のご協力により、素敵なプレゼントがもらえます。ハッピー要素は欠かせません。

このクイズラリーのもう一つの目的は街づくり。これには大成建設株式会社などの企業が共同制作した WEB アプリ「Enabling City Walk! 」を使用します。歩いている途中、気になった場所の写真を撮って頂きます。写真に「タイトル」、そして「ハッピー / アンハッピー」と「ヘルシー / アンヘルシー」に分類して投稿。投稿によって街の現状を可視化できます。このデータは、福町周辺、そして西淀川区全体を幸福と健康にするために活用します。

今回の「イネーブリングシティウォーク」にはたくさんの企業や団体に関わっていただきました。今後も千船病院は健康というキーワードで企業や大学や専門学校など様々な業種の方々と共創、自然と健康になる街になるように取り組んでいきます。

村田 尚寛（むらた なおひろ）
リハビリテーション科　科長

2009 年、理学療法士免許取得し愛仁会リハビリテーション病院に入職。2014 年しんあい病院を経て、2018 年より千船病院リハビリテーション科に勤務。2022 年より千船病院のより地域に根差した医療の展開に向けて、「ストリートメディカル」を提唱している横浜市立大学先端医科学研究センター コミュニケーション・デザイン・センターへ出向。「ストリートメディカル」の概念と実装の仕組みを学びながら、千船病院・西淀川区に汎用できるよう奔走中。

「千船生まれ！」

『虹くじら』読者のみなさん、初めまして、〝ゆでたまご〟の嶋田隆司と申します。相棒の中井義則君と『キン肉マン』という漫画を描いています。

なぜ、虹くじらで連載を始めることになったかというと――実はぼく、千船病院のある西淀川区生まれなんです。

この連載を始めるにあたって、ぼくの母子手帳を送ってもらいました。昭和35年（1960年）10月28日生まれ、住所は西淀川区佃495になっています。千船病院が元々あった、阪神電車の千船駅のすぐそばの木造モルタル造りのアパートです。ずっと後になってから、昔住んでいた場所に行ったことがあったのですが、当然のことながらまったく様子が変わっていました。生まれたのは、千船病院だったら良かったのですが、竹内病院というところでした。

現在の西淀川区は、梅田のベッドタウンとしてマンションが建ち並んでいます。ぼくが住んでいた頃は、大阪市内屈指の工業地帯。空は工場の煙突から吐き出される煙でいつもどんよりしていて、空気がすごく悪かった記憶があります。ぼくは子どもの頃から小児喘息に悩まされています。このときの生活環境が原因だったと思っています。あの当時は、子どもが暮らすにはあまりいい環境ではなかったような気がします。

父は「箱屋」という仕事をしていました。箱屋というのは、国内外に送る荷物を木の箱で梱包する職人のことです。職人気質だったせいか、1つの会社でずっと仕事しているという感じではなかったようです。色んな会社を転々として仕事をしていました。良くいえば、フリーランスのプロレスラーみたいなもんです。そのことで母から叱られていましたね。

実は父のことはあまり知らないんです。

父の両親、つまりぼくにとっての父方の祖父母はやはり西淀川区の御幣島に住んでいました。後から知ることになるんですが、この二人は父親にとって実の両親ではなかった。身寄りのなかった父を引き取って育ててくれた養父母です。父も母もあまりこの養父母のことをあまり語りたがらなかったので分からないことが多い。なんでも、旅芸人一座の幕引きのようなことをやっていたらしいです。幕引きとは、舞台で幕の開閉をする人のことです。

ぼくは子どもの頃から「肉」が大好きでした。特にすき焼き。昔は、牛肉は本当に高かった。祖父母の家に行ったとき、すき焼きで肉ばっかり食べたら、「もう、この子はほんまに意地汚い奴や」ってすごい言われたんです。そう言う癖に、父以外の〝ぎょうだい〟の子どもたち、本当の孫たちには肉をいっぱい食べさせるんです。子ども心に、なんかおかしいなと思いました。そういう経験が、人の心のひだを感じるというか、表現者の足腰になったのかもしれません。

こんな風に話をしていたら、西淀川区が懐かしくなってきました。今度、千船病院に顔を出して、あのあたりを久しぶりに散歩してみようかな。

（構成・編集部）

ゆでたまご嶋田先生のコラムが読めるのは『虹くじら』だけ！

嶋田隆司（しまだたかし）

1960年10月28日、大阪市西淀川区生まれ。私立初芝高等学校卒。中井義則との合同ペンネーム「ゆでたまご」の原作担当。『キン肉マン』は嶋田が中井に出会う前から描いていたキャラクターが元になっている。緻密な設定を作り、読者の反応をたくみに取り入れたストーリーを練り上げると評価が高い。キャラクター原案のデザインも行っている。

© ゆでたまご

千船病院 技術部
リハビリテーション科

主任／理学療法士
坂口 勇貴
さかぐち・ゆうき

理学療法士
椎葉 勇生
しいば・ゆうう

理学療法士
永尾 智哉
ながお・ともや

05 太陽温泉

千船駅より千船大橋を渡ってすぐの太陽温泉は、店主の中野さんが木材をメインに沸かしているそう。ずらっと並んだ洗い場には細長くつながったタイルの椅子が固定されており、レトロな見た目の良さだけでなく、立ち座りをサポートしてくれるという優れものです。昭和の時代にタイムスリップしたかのような、心も身体も温まる魅力のあるお風呂屋さんです。

大阪市西淀川区大和田 3-9-12
阪神 千船駅より徒歩 5 分
☎ 06-6472-8419
[営]15：00-23：30　[休] 月曜日

06 小春湯

ミネラル鉱石を使用した小春湯は、主湯（おもゆ）は熱め、寝風呂はぬるめと浴槽により温度を変えてゆっくり楽しめるお風呂屋さん。脱衣スペースが広め＆ドリンク類も豊富でお風呂上がりもゆったりまったり過ごせます。身体を芯から温めてくれる塩風呂や、プラス料金なしのサウナと水風呂も魅力！

大阪市西淀川区大和田 3-4-7
阪神 千船駅より徒歩 10 分
☎ 06-6471-2169　P 駐車場有り
[営]15：30-23：30　[休] 木曜日

錦湯に向かう前に緑陰道路でランニングや自重トレーニング！そのまま走って錦湯へ!! 太陽の光が差し込み、キラキラ光るきれいなお湯。そこに反射して映る鍛え上げたボディを見てウットリ…。仕上げはサウナでもう一絞り!!! 身も心もリフレッシュできます!!!!（坂口）

07 錦湯

震災の時も変わらず鎮座していたという守り神（招き猫）が出迎えてくれる錦湯は、天井が高く開放的で、目にも鮮やかなタイルアートが魅力。ハイドロバスが疲労回復にもオススメです。住吉温泉の西谷さんは店主の大畠さんの実妹だそうで、ご兄妹でそれぞれ銭湯経営をされています。こちらもタオルとシャンプー、ボディーソープの貸し出しが無料です。

大阪市西淀川区大和田 6-3-26
阪神 出来島駅、福駅より徒歩 10 分
☎ 06-6472-2937
[営]15：00-23：00　[休] 土曜日

08 ヘルシーバス 松の湯

階段を上がって 2 階にある入り口が珍しいヘルシーバス松の湯。駅近でコインランドリーも併設と、区内きっての便利な立地のお風呂屋さんです。こちらも館内には男女共用部に待合スペースがあり、ゆったりとご家族でご来店いただくのもオススメ！

大阪市西淀川区姫里 1-19-24
阪神 姫島駅より徒歩 3 分
☎ 06-6472-3519　P 駐車場有り
[営]15：30-23：00　[休] 不定休

細マッチョ軍団が案内する
「西淀川区」

お風呂屋マッチョ

千船病院に来たら是非立ち寄って欲しい！

西淀川区にはいい雰囲気のお風呂屋さんが多数あります。千船病院の「細マッチョ」軍団の精鋭たちは、トレーニングで使った筋肉を疲労回復させるため、いいお風呂屋さんを沢山知っています。
温浴効果でリラックスしに来たはずが、浴場の段差に惹かれてここでも筋トレ?! 各店舗の見どころを肉体美と共にお届けします！

01 住吉温泉

住吉温泉は近隣のお泊まり保育での入浴の受け入れも行っている、まさに“地域に愛されるお風呂屋さん”。タオルにシャンプー、ボディーソープにドライヤーまで貸し出し無料です。こだわりのスチームサウナは肌・髪・喉に良しといいことずくめ！

大阪市西淀川区野里 1-14-3
JR 塚本駅、阪神 姫島駅より徒歩 7 分
☎ 06-6471-2241
[営]15：00-24：00　[休] 土曜日

住吉温泉の目の前には野里公園があり、ブランコや滑り台といったまさに筋トレ器具が勢ぞろい!! 7 色に染められた壁を背に浴びるかけ湯は最高!!!（椎葉）

02 光 天然温泉 野里の湯

2017 年に改装したばかりでホテルのように綺麗な現代風のお風呂屋さん、天然温泉 光 野里の湯。何といってもオススメは天然温泉！木材とガスで沸かしているので、やわらかい湯質が心地良いお風呂です。さらに男女共用部には待合スペースがあるので、お風呂上がりの待ち合わせもばっちり。

大阪市西淀川区野里 2-22-30
JR 塚本駅、御幣島駅より徒歩 8 分
☎ 06-6474-1018　P 駐車場有り
[営]14：00-24：00　[休] 火曜日

03 丸の湯

大きな天窓があり昼風呂にぴったりな丸の湯。幹線道路のすぐ近くにありながら、電気風呂、高温サウナ、水風呂と充実のラインナップです。
西淀川区では早くから取り入れたという高温サウナもプラス料金なしでご利用可能！

大阪市西淀川区野里 1-30-12
JR 塚本駅より徒歩 8 分
☎ 06-6473-3079
[営]15：00-23：00　[休] 金曜日

04 八丁温泉

西淀川区のお風呂屋さんイチのエンターテイナー、八丁温泉 池川さんの経営理念は『3 つのやすい、だけ』とのこと。“入りやすい・居りやすい・喋りやすい”を大事にする八丁温泉は、お客さんの要望に最大限応えてくれます。強力な電気風呂のほか、多くのサウナ愛好家の声により水風呂は驚異の 14 度！お子様用のおもちゃも完備。

大阪市西淀川区御幣島 3-10-2
JR 塚本駅、御幣島駅より徒歩 12 分
☎ 06-6472-2761　P 駐車場有り
[営]15：00- 翌 1：00、日曜朝風呂 8：30 -12：00　[休] 月曜日
hacchou-onsen-81010.amebaownd.com

【新連載】編集委員コラム

「くじらのつぶやき」

第１回　事務部長 車田絵里子 委員

編集委員の車田です。４月から千船病院のメンバーに加わりました。愛仁会グループに入職したのは（思わず、遠い目に……）、そろそろ、新卒入職の方の生まれ年に近づいてきました。

高槻病院（高槻市）→愛仁会本部（西淀川区）→厚生労働省（出向／東京）→愛仁会リハビリテーション病院（高槻市）、そして今に至ります。愛仁会のルーツである千船病院は、一度は働いてみたかった病院です。創業当時から変わらない、地域に最高の医療をお届けしたいという想いを受け継いでいくことに加えて、この「虹くじら」にも象徴されるように、地域のみなさまの暮らしに溶け込む医療をお届けする病院として、チャレンジを続けていきます。

さて、昨年10月に始まった５階・６階フロアの改修工事が、４月末に無事終了しました。まだ築浅の病院なのに？！と思われるかもしれませんが、当初の想定を大きく上回る分娩件数となっていることが改修の一番の理由です。2022年の最新の調査によると、当院の分娩件数は大阪府第１位、全国でも第５位でした。今回の改修工事では、『より安全・安心な分娩を実現する』を目指しました。分娩室・個室病室を増設、個室陣痛室や陰圧対応分娩室を新設。お母さんやベビーにはもちろんのこと、働くスタッフにとっても優しい環境になっています。工事期間中はご不便もおかけしましたが、ご理解とご協力をありがとうございました。今後とも千船病院を宜しくお願いします！

LETTER FROM CHIBUNE

千船病院では、２０２１年１０月から人の集うきっかけづくりとして毎週木曜日にキッチンカーイベントを開始しています。さらに、２０３２年完成を予定した阪神なんば線福駅の高架化計画をきっかけに福駅周辺の活性化を目的とした「福駅周辺活性化協議会」（現・福駅周辺活性化協議会）という地域住民の組織が発足。２０２１年１２月にはキッチンカーイベントの拡大版としてクリスマスイベントを共同で開催しました。このイベントは「福（町）でみんなが幸せになるお祭り」という意味を込めて「福ハッピーフェスタ」とで命名しました。この福ハッピーフェスタは定期イベント化して現在も継続しています！

「看護の日（５月）」「夏休み（８月）」「クリスマス（１２月）」と時期に沿ったテーマを設けました。５月１２日は、近代看護を構築したフローレンス・ナイチンゲールの誕生日にちなんで看護の日となっています。そこで５月のハッピーフェスタでは、健康相談など医療・介護・予防が連想されるイベントを行いました。また、８月は夏休みのお子様向けの玩具づくりなどのワークショップ。そして今年も１２月３日には地域住民のハッピーとヘルシーが叶うようにと願いが込められたカードでクリスマスツリーを装飾する「クリスマスツリーに願いを込めて」を行う予定です。毎回、福駅前では、お子さまから高齢の方まで幅広い人たちの笑顔にあふれ、人々の会話、笑い声の絶えない明るい１日になっています。

現在、このハッピーフェスタは西淀川区との共創事業となり、地域・企業・行政が一体で作り上げるイベントに成長しています。今後も福駅周辺の活性化だけでなく、西淀川区民の幸福と健康を高めるイネーブリングシティ（Enabling City）――西淀川区としての魅力も発信していきたいと思います。イネーブリングとは直訳すると「可能にする」という意味です。イネーブリング・ファクターは幸福（Happiness）と健康（Health）の双方を高めることの可能な、製品、サービス、空間などの因子の意になります。ウェルビーイング（心身と社会的な健康を意味する概念）を実現する新しい都市像と考えていただければいいかと思います。

（地域連携部 地域医療科 科長 大橋健志）

虹くじら　編集委員から一言

千船病院広報誌『虹くじら』は、編集チームと病院内編集委員による会議から企画を生み出しました！

千船病院　看護部 副部長
牧山 文

01 号・02 号の虹くじらは千船病院の中の「人」を見ていただきましたが、今回はその人たちと地域の方とのつながりを垣間見ていただけるものになっていると思います。これから先も千船病院といろいろな人とのつながりを大事に、千船病院が成長できればいいなあと思っています。また次回も期待してください。

地域連携部　入退院支援センター科 科長
黒田 朋子

虹くじら 03 号から携わらせて頂いています。初めは色んな段取りが大変そうだなと思っていましたが、取材が進むにつれて、読者の方にこの思いをお届けしたい気持ちが強くなりました。取材の過程で、お２人の患者さんとそのご家族に接する機会があり、主治医が記事になることを喜んでおられたことが、よりその気持ちを強くしました。

虹くじらを通じて、読者の方と千船病院との距離が近くなれば嬉しいです。

千船病院編集委員
樋口 喜英
車田 絵里子
牧山 文
越智 敏之
黒田 朋子
村田 尚寛
大橋 健志
脇本 出美
河野 優雅

スーパーバイザー
結城 豊弘

編集長
田崎 健太（カニジル）

編集
村上 敬
今中 有紀

写真
奥田 真也

デザイン
三村 漢（niwanoniwa）
大貫 茜（niwanoniwa）

今号表紙イラスト　楓 真知子

千船病院までの行き方

所在地
〒 555-0034 大阪府大阪市西淀川区福町３丁目２番 39 号
TEL 06-6471-9541（代表）

電車でお越しの方
阪神なんば線「福駅」下車　徒歩１分

バスでお越しの方
大阪市営バス 92 号
福町行『大阪駅前』⇒『大野』

大阪市営バス 43 号
酉島車庫前行『大阪駅前』⇒『福町三丁目』

千船病院公式 WEB サイト
https://www.chibune-hsp.jp

千船病院公式 Instagram
@chibune_hsp1958
毎週木曜日の「キッチンカー情報」など盛りだくさん。登録お願いします！